

算者の落穂拾い（毛呂山の場合）

山口正義

一、はじめに

毛呂山周辺の和算や算額を調べはじめて六、七年になりますが、どうも毛呂山町には算額は存在しないようです。また和算（算術）家の事績も承知しません。

それでは毛呂山近在の算術師匠に入門し、算学を学んだ算者はいないのだろうか。

算額や石碑には多くの門人名が刻まれていることがありますが、注意して見ることにしています。毛呂山周辺では吉見町の矢嶋久五郎の算額や墓石、東松山市の小堤幾蔵の算額、滑川町の小林三徳の算額、嵐山町の内祐五郎の石碑などに多くの門人名が刻まれています。しかし、これらの中には毛呂山に関係しそうな門人名を見ることはできません。

残念と思いつつ月日が過ぎましたが、一昨年あたりから何人かの門人名を確認できたので少し述べたい。

二、吉田勝品の門人平山山三郎

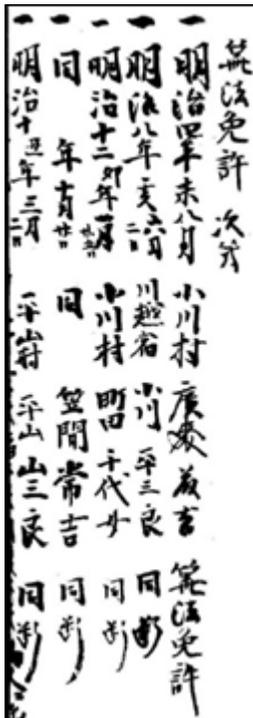
小川町勝呂の吉田源兵衛勝品（文化六年〜明治二十三年）は小川町笠原の福田重蔵に關流和算を学んで、「關流九伝免許皆伝」（九伝というのは伝系を調べると辻褄が合いませんが）を受けた人物ですが、「吉田勝品一代誌」というものを残しています。この「一代誌」は八十七丁に及ぶ長文で、当時の和算家の生活を知ることができる貴重な史料です。幸いこの史料の複写を小川町教育委員会から入手することができました。

この書物の中に、「隠居以来、明治二年二月算術指南小川村永井永五郎、大塚村伊藤政七開平迄傳授、同四年未八月小川村白木屋廣森藤吉免許出す、同五年申正月小川村笠間茂兵衛外にも門弟大勢あれ共、開平法以上高弟而已書す。同年七月平山村山三良、同久平、同八月青山村恩田與兵衛、……」のように色々な人達に算法を伝授した記述があります。この中に波線で示したように「平山村山三良」の記述があります。また、勝品が与えた「算法免許次第」の記述が、小川村・川越宿などの四名と並んで、「明治十五年三月二日 平山村 平山山三良 同断（算法免許）」のようにあります。

その後、勝品の実家には明治十一年に門人たちが勝品の七十歳を祝して建てた「寿蔵碑」があることを知りましたので、昨年（二〇一三年）見学させていただき



吉田勝品の寿蔵碑（右）と平山山三郎の文字（左）（小川町勝呂、2013年4月）



「吉田勝品一代誌」の一部

ました。その碑には門人三十名の名が刻まれています。その筆頭に、「免許 岩井 平山山三良」とあるのが確認できました。平山村が馬場村などと合併して岩井村になるのは明治八年ですから、碑にある「岩井」は納得できます。平山村と岩井村の両方が出てきますので、平山山三良が毛呂山の人であるのは間違いないでしょう。

なお、先の「吉田勝品一代誌」に出てくる「平山村山三良、同久平」の同久平については不明でした。

さてここまで書いた時、この平山山三良(郎)は毛呂山の「平山大尽」の直系の人物であり、久平は島田久兵衛のことではないかと、内野勝裕氏に教えて頂きました。

「平山氏」は後世(明治)になってから改姓されたもので、その前は「斉藤氏」でした。斉藤氏は松山城主上田氏に仕え、天正十八年(一五九〇)松山城落城とともに帰農したといわれます。文献(2)によれば後の平山大尽になる豪農の家系は享保年代の初代富世(通称山三郎)から始まり、富栄(六右衛門)↓富秀(文右衛門)↓富吉(牛十郎・覚右衛門)↓富延(平治郎・文内)↓易富(左司馬)↓富樹(平馬・実平・左二馬)↓山三郎↓庫治と続いています。富吉からは代々平山村の名主を勤めています。左二馬は権田直助(一八〇九く八七)との交遊もあり、早くから国学を志し、安政六年平田篤胤の門に入っています。そしてこの左二馬の代に「平山氏」に改姓しています。左二馬は岩井村戸長や毛呂村初代村長を勤めています。なお平山家に伝わる七千点を超える膨大な古文書は埼玉県立文書館に「平山家文書」として収納されています。

平山山三郎はこの家系による八代目であり、墓石によれば安政二年(一八五五)十二月十七日生れで、明治三十七年に家督を継いで、昭和二年に七十三歳で亡くなっています。既述の一代誌に出て来る「同年七月平山山三良」は明治五年で、十八歳の時入門したと思われる。「寿蔵碑」の明治十一年のときは二十三歳ということになります。

また妻「きょう」は、墓石によれば比企郡腰越村(小川町)の横川氏の出であり、明治十一年四月に山三郎と婚姻とあり、墓の正面は「平山山三郎大人 平山きょう刀自 墓」とあります。

腰越村と勝品の勝呂村とは5km位離れてはいるものの、それでも岩井村(毛呂山町)から凡そ30kmも離れた勝呂の勝品の門人になったのは、妻の実家との位置関係が影響していたのでしょうか。

次に、平山山三郎の算術に関する資料が「平山家文書」にないか調べてみましたが見つけることは出来ませんでした。

が、算術の資料として、「算法記」(嘉永三年 斉藤平馬)なるものを見つけられました。この「算法記」にある「斉藤平馬」は内野氏によれば左二馬(山三郎父)の幼名であるといえます。『毛呂山町史』には左二馬の墓石の碑文が書かれています。それによれば天保三年(一八三二)生まれとありますから、「算法記」にある嘉永三年は十八歳ということになります。この「算法記」の概要は次のようなものです。

表紙・算法記 嘉永三年 戊二月吉日

裏表紙・斉藤平馬 (他に文字あり)

構成・十三丁、横半切12×16cm

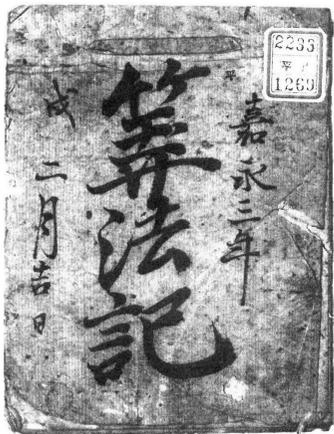
内容・開平法・開立法・単純図形の面積・利足算・位附など

開平法は十一問、開立法は八問、単純図形は七問の問題と答が記述されていますが、いずれも結果のみであり、そろばんで計算した結果と思われます。何かの算書を真似したのかと思いついてみましたが、塵劫記などに類似問題があるものの、同じ問題は見つけられませんでした。

平方根・立方根が123とか1234になるような数字を選んでいるのは面白い。円積では直径三十間の面積を、円積率×30×30=711坪としています。本来の円積率は(π/4=0.785...)ですが、ここでは0.79を用いています。また11坪を畝歩に変換して示していま



「算法記」の裏表紙



「算法記」の表紙

す。それは「二反三畝二十一歩」とあり、計算してみると正しい。これらの問題や利足算は当時の実用算の範囲だったでしょうが、一般的な寺子屋教育の範囲を越えていて、算学塾で習ったものと思われる。左二馬（平馬）がどこの誰に習ったか気になるところです。

三、宮崎萬治郎の門人

ときがわ町大附の宮崎萬治郎（文化五年〜明治十六年）は墓の碑文によれば、天文・暦法・医易、さらに数理を究めたとあります。大工が本職であったようですが、碑文には書かれています。近隣を教え歩き多くの門人がいたようで、墓の台石には、「大字本宿岡田軍治郎を筆頭に、大谷、長瀬、岩川、小山、小杉、西本、大豆戸、五明、腰越、桃木、田中、志賀、日影、其の他の人々が多く姓名を列して居るが、甚だ読み易くない。そうして門人計三百人と記す」（武蔵比企郡の諸算者）三上義夫、埼玉史談（1919年）とありますが、今はほとんど読むことが難しいほどに風化しています。『都幾川村史』には門人・世話人等六十名が刻まれているともあります。

宮崎家には入門時に血判した「神誓文之事」（誓約書）が四巻残されています（筆者もその一部を今年見せていただいた）。

『都幾川村史』によれば四巻で七十三名の門人名が記されていて、それは文政十二年から明治元年迄です。『都幾川村史資料4（6）』には門人の具体名が記されていますが、その中に毛呂山に関係するものとして次の四名がいます。

- 嘉永元年十月吉日 武州入間郡葦和田村 廿四才 音次郎（血判）
- 嘉永二年正月吉日 武州入間郡箕和田村 二十才 栄次郎（血判）
- 嘉永七年寅正月 武州入間郡長瀬村 廿三才 千松（血判）
- 嘉永七年三月吉日 武州入間郡平山村 廿一才 丈七（血判）

このうち「千松」は、内野氏によれば大正時代に県議会議員・衆議院議員を勤められた斉藤小十郎の父親であるといえます。また、音次郎は関口氏、丈七は島田氏ではないかと推測されています。

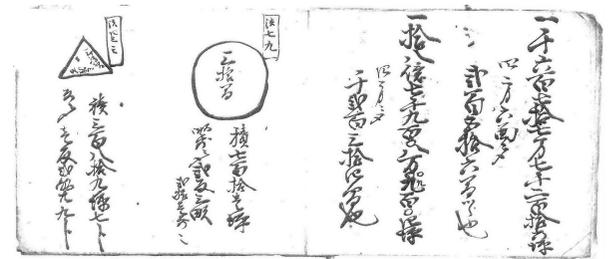
四、まとめ

このように江戸末期から明治初期に、毛呂山でも算術師匠について算学を学んだ具体的事例を知ることができました。なお、吉田勝品は「算法九章名義記秘術帳」を著しています。それは田畑面積・両替・利息算・連立一次式・勾股弦・多角形・開平・開立など初歩的な内容を含んだもので、平山三郎もこれらの内容を勉強し理解したことと思います。

（謝辞）内野勝裕氏には平山氏及び宮崎萬治郎門人について多くのことを教えて頂きました。記してお礼を申し上げます。



宮崎萬治郎の墓
（ときがわ町大附、2014年4月）



「算法記」の内容

【参考文献】

- (1) 「吉田勝品一代誌」 小川町教育委員会
- (2) 内野勝裕 「糧寮碩布」 まつやま書房、昭和六十一年
- (3) 「毛呂山町史」 昭和五十三年
- (4) 「算法記」 埼玉県立文書館の平山家文書
- (5) 「都幾川村史資料4(6) 近世編明覚地区II」

『あゆみ』第39号（平成27年3月）